青根巷記

特別
へ10
7360

< 2002-340 >

ヘ10
7360

宮城県図書館

青根の山の奥山より温泉わき出る事
時代まの有久む藥師如来霊験あ
鹿追ひたる草分しとゝやまそよの事乃
出湯よりあらはれ山上に御堂をたてゝ
ゝ事ゝ此ゝ今も猫塔のあるゆゑ久く
照法ゝ國の国ゝ祈ゝ人念
ゝ法ゝ根ゝ事ゝ此ゝ事 祖父君
世ゝ初ゝ初ゝ坊給ゝ此世山の
藥師佛ゝ国ゝ夢ゝ人ゝ
あゝ事ゝ世夢あゝ二ゝ湯よ

治し給ひし程も月日經ぬるにつけて猶さへおほし
久しく御所の上におはしましつるは忘れ
給ひて古稀の御齢もあまたに及ひ給ふ
給ぬ帝も打わらひさへある病ある年自
おし侍る二ところ治ひしてよりさまさまし
はしまして世をしろしめすに年をまて
治まるとのくにゝちるきしの国はしらしめし
高家くしてまさる増減の事ありて居ゐね
今年八十まて何くれのことゝも又やこゝろ
さらひまやおもふ事なるおもひしにたまし

さらに志ねてすゝむれて國の勢のひろとも有て
弥生月末方の八日わたをこめておうちぬるふに
のおほかたわらわよ梅をわれてけやおもしき
はし流く雲をきまけれは晴のころもまりから
称よ東のこゝろ尾さく眺むるもとしは
尾上の鐘の声きこゆるもあはれにつきせぬくわ
読まる方なる人の袖さむしとちるにきみし
はあしたの給ふ恵みの露のおもふ所せく
おもひしもまよふかくまれりくゆるわかれを
空月得てひきわかるゝる時は詠ひちたの字

出屋うぬ舟日乃記すまりしてて
うれなのにあふよふとうをれ歌
是をもてて山路ようまれ海面蔵屋をを
いふひをれうを山ををいをこの新舞をれ乃
すを紅葉を仰きこを拝を峰よ山の小林乃
色を錦を濕しをを原を小見るの塵の
宮う紅を見をきを流きをのうをとうをを
いを巻のうをを家の鹿橋を渡をいを
なをきををるを先をあをををを是をを
ををいふ新の意しを賜の時を屋を中中をを

おをををを紅道の宮を松木あるをきをうかを
紅を影家を白をくをを中是をを山路の男
乃すをををを枝出ををとを見るを塔を
路をを山の家をををををかを橋をわを影
ををの色けを家をきををを仕を塔を
仕業をををををを屋をを
是けをを時の橋木の綱を縄
いををををを家をををを
ををを人を紅是紅ををかををを紅を
庫ををを出をを乃橋を今日小屋の紅を紅

初あたりまでは山ばかりにて
海をへだてゝ人家いとあつまりたる
うれしく村の繁あるを
くるまにてさて行くに思ひ
屋敷あるよ赤石小野と屋うんちも
まもなく是より西道のほと何はまあ
なむとかえの人にて繁昌するなり
少しにて三里ばかりあるおしやふ
いまだ高く中宮をとゝまりあるの
きれをかくて日のくれまでに赤根よ

まもあれよりまつ宮をはいとくあるを
たゝまつりて
赤山あれの枝の形をなを色くれ
なるいろいろ不思議あるぬ
馬よりまつ行もるに川はたらぬ
あるい村へ出むひぬ赤をたてうち
うゝしりうゝあり何川と屋うんを
たゝねとたゝ流の紙のくるに十里
あ西宮打渡てかきもまぬ野路の
萱原踏ゝけつゝ行ぐ赤根の山の赤を

志賀高原山中に新たに拓かれし民家
かまと見えて久しき丸太ばりの
高原湯の嶽の麓に出湯の湧出ずる
人を見あはせかめん物をとゝのへ
かるまつりをなす雨乞の場なるか
雨きれいまだ日影をはのぞかぬ青根の
山ふかき所なれど初夏にまよふる供の
人々に坪湯のさかなとのたまふ限りなくよ
ゝをゝ訪ふる保養らるあるいをゝ
帯を脱のよふあひ折ふくゝ花し

同じ高かゝる所より流れ入る活しひのつれ
ゝ水神ふの流れ有りて家四十九日
相ゝ話ゝ聚ゝ賑ゝ
温泉に入る有り相ゝ
所を打ちゝ
いゝ坪湯の座清く流れる岩の数々間
うゝ見るまゝ
ゝその湯を掬ふ
まるものゝ
ゝにかゝるを

砌泉をうしのたくひよりは御よかくまて何や
う清よにて聽ふ山の禁うち茅清宮乃
戦あるむよりまた山里しる味の唐す
いう殿の泝到てもいたに四を浪ふはの
つまうまうしうは

又きうしわ〻し孔塔に光うて
月明て出陽のきよりうち社を
宣遥うに出もて祇里の鳥よ雑を揺え
と遥て侍ふ人をのこ折つまて陽仕ふ山ふ
ムうつて折うに見るに主根の山の主根ふ

今やけうきうむ主にうあまし久学乃
角ておて二月の前うきうるあるあるかう
折しみうあうきうるあるとおのつきうあうと引く
主うあうあぬ

主根ふ社の名を片に石祇宮の
うむふ主ふの衣きうう宮
中に何をきうる山の名を中の名ふ
とふうさうあうあうと何やといつとまふ八ふと
うあうあ　おをひうきうあ厚神宮社を
花ふさの名をよさうあ主ふをうたを

松もし都すみ路なく色なれは
くしまてみる 義門
藤しなく深き紫宿の上は
まりなき色しく路ともみゆる
かくて緑の色紙の影に見ゆるこそ末の宿
たふれをも絵に写しつゝ家ちかき庭には
きやうてる画のさまくなる絵にゆるくまにみゆる
いはくるかくて出ち里の犬吠えて葉
の営原諸国ゆきて鳥立ちかくるまよ
きふその山路なの中すて深の山谷の石みゆるの

新湯といふ所まて見ぬ是も湯を湛ゆる
なかいくさの病を治する効もかくあると
眼もあかきにしたかひ泉水にふきよせて
袖ぬれ湯気にあたりぬさ閑かなる古き
ならひしに国のおさなる信憲の湯もよふ
事なかなく長閑健にまぬる流れしるは
おそくの程く今日此さふ中に納し若ぬれ
例の屋と里に帰りて信憲とも知らして
かきぬとにもし見行くれと物語しぬ日暮て
ねちゆかしきを過てなるせる人くもかるとそあり

下かる湯に入る又其中に根米にいとゝ湯の蟹
ともに流れて蛇くるよすきなき誰といふ志ら紫え
細きむしまでゝ戸川あふる集かるか梓湯の
ことに里村の余にあるも志ちしきあ給ふ足と南くて
流ふまゝと後入りて髭もこゝろ志るうしうは
かくえの人〻あまてさらまよし人ゝ参り入湯
ある神と西揚ての川原らしく甚あるてと上
おほひの夜よる里朋のきぬまて志らにこち
ぬまて扶桑けふまてをまほふ出る志ち也
うるほよりおる根ぬらしといふ新まゝ京歌を

人をぬしおもる裁めてあかかしこけるあかれ
多くの名といふ浮をあらぬとていさき上也ぬ
よく待ちぬ荷さ行くなふる南しうはと里あ
つをたかしるに一真知をもて川くゝ起し
老人ありもちしきおもる路よ流を記しこ
浮ままさる人もとめにいひ出て笑ひしたうり
思ふてそれそ又門根本の静りきた梓湯
の滝の音おもひあふおも所て
新まふく風音かゝひとて又京根元
こう尓ひの滝流も書おくをみゆく

唯まは母を立ちて立ちて別れ難き様を
時雨うちうち降りまに涙の雨とくくや
鶴雲ちらくちらくて雪うちはらうて
あやまちまあやまちまを自ら法神を
拝む。うちうちうちうちて陽に入りて帰る
つとめ行ひかくてあの山に行かり業師
の来陽禅の御堂に詣でて立帰ぬまと
立ちはなれるまに赤すぎ赤すぎに
うちうちうちうちいて川狩りなるとかくも
ふ無くて私の長村の毛ちとはれたる事

ちちうちうちうちは行ひちやとなりしぬ
に今鶴くく信憲公当麻物てうち帰雪
鶴ちまを出ちを写くくうは豊臣ちと
に世里の老ちる猟人京国を行先のの
川ちゆ山猟いちるかちのちくふ小魚網
はしてちを見川ちちを屋をしてを
山ちを物ちをちちのつちぬ信憲
長周ちくいて国の雪ちう倫ち耳く
何ちまのちをかちちにはちりて拝をいく
立ちかのくを時ちをつちて帰ちちちを孔ハ

志ばしすゝむ宵に野原といふ所に蛇まし
いねまして立ち出でておひそぬ二日くし
多田のかゝり菩提よ人と御山に詣づる衆はさらに
川あろのかけしは なかいくるほとの
御山を不忘山とて代々の歌人乃手染
乃林隠たちたく名くらゐ跡とりの優婆塞
うおことなふ山たちさきとおと、ねそふうち里
にしく山上蔵王権現乃御堂あつまおくれ
頭のむら里の詩人金乃御嶽よ年
黒くさらし清めし旅明る雨晴る

日ぬかしてまち給へる事かなし今日は此まゝに
さくは田のうちなれもいつあらむと此所の
老人等とハおくりたぬまけいあれハ是し
まちわるあひ給居てわひハおゝさるまし
とて若きは小筆しあたなこのちにいさゝ立
いそぬきなる持をぬ日なかれるたちまゐる
何しとて義門のむ其をちあしてさぬを
なかつるかくて日の入ぬるほとのおまきくて
帰りてくれをへいふ中ぬ年山のさうはしと
家とかりふまろよきとやうりもまちいもちつまし

あやめもかきくれて侍りしくもたに見えまゝに
峰こえしつゝあらぬ方をさして行くに出
根ふこかゝれる山の峰を枝折傍に松
なくおもわけ侍るに、いとゝ物のおそれ
ふかき斗まて道もさとりかねつゝは
あまた山ふかく分かへるに若き者のおほく
御堂に詣て来たりし人も侍るとて
ありしあたりより四方のけしきは、やうやう
あかれたる路しく風おもしろく物をおく
かくあるにてみれはなかめもおもしろき事

さいつころ二日峠をこえて山陰に
七日戻りとりふ牧ありて小笹原かや
ふる野飼の駒あまた行ぬ所の主村典
かの屋をとゝめてわか根にとまるこふ
ゆゑに真しめ今年もこと多かりし
何くれの四つもたゝひとつ年毎に
見る言葉も有りて義門義是
代るゝ物しむ野とあの駒の毛色
赤川の馬になるにや見えつるかな
あまたさふらふしもかゝれは

夜ゆく伴に松山嵐たけしく吹落て枕の
山よりおろす声々ふきおろせる花落葉
とりひし唐土の詩も心にうかびしうは
花ならぬ落葉にはかなく惜むらんの風たえたえ
いつはり落葉の露にあまりての
枕そうしさ[illegible]ふ 松虫の 山の音
あくる日までやおもし 旅路の雑子鳴
してたけ行く 足もよその行しや
さらぬ日の[illegible]精にさるも寝覚は世とも
なるものとし おつく 山さき[illegible]

かへりしてまつ浅茅が宿もの落葉衣はまたく
一ときそれすらなかなかかつて見ゆ
新[illegible]てふ[illegible]豊乃紙の宿を
おちきよのにしよりけてゆりしき
あらしのくるあらきて谷の新湯[illegible]り
みて先様おしよまそし体らひぬ転[illegible]
くまき人くれ[illegible]まれ落葉ふつきあ[illegible]め
焼くおきて[illegible]もたぬとも出しくるこかす
[illegible]ろ[illegible]もとむふかく木そひの宿
[illegible]いあるふかふそ[illegible]

扨墨画とは杉蝶つゞきいへる絵の
去りながら少しおよそのあらまし
かゝしては色とりを帰つきぬるをしほにしや
あらし絵につき昨日も杉ふ書て来ても紙に
墨さへの字は墳湯のさ傳まへ四方の色て
の唐ゑにまふうちまて色なき筆に宋蓋
多くしての大家を加へきめるよ龍のやさま
にかきぬやうの其外も用ゐ紙に絵
それを山水ゆゝきうふおもひありて人物畫
持くまたおゝら花なども多いへらひとつそて

筆の跡をおもしろき昔は跡よ恥かしく
うきゝ雪五月まで婦君の居りつとはいふて
何とさくかゝしめ定義にけおもは御山へ
気とぬ人のもて北なとめふよりもなきぬや
うまし雨えを路たしく五角して寸をもよ
たえぬ汁等をれた法律色いつして經つて
のけるかたきよ分尋の歴々御かゝは
くもし文章は蘆豆よすまをふるくいつはるす
ぬるきによやふくれ不路しくかくえの山をて
白妙にして崇間の名の皐水ハ水よ宗

[illegible]駒の嶽をも見あげ
[illegible]く清らかなる六月の鹿狩を
[illegible]の神ゐしていとき出るなり俳諧
きあい人を仕立てをちぬれば
うるてに庵をとむこと[illegible]かるべかれば
遊るけるまに俳諧の[illegible]
西[illegible]て[illegible]

風雅に同句をあるく見るゆま
くをこそ[illegible]ふ四月はじめのを

中[illegible]に新めるあるもあるべ
人[illegible]基おもあるべ[illegible]
[illegible]顔を[illegible]
老人[illegible]
おむひ五[illegible]
[illegible]
都[illegible]
たとし[illegible]
似[illegible]
[illegible]中川の宿に
[illegible]

まをもしへて不宵も七日を毎日の為日
に三ツ物事をたゝれをけまをしを晩
三の宵うれ恐ろ九仕りぬるき
人々この業をまをしをとるをなり
三ツ物かもれ器換出をるとに時
うはるを始を帰のまの宝ろを
して言根たろしの吹ろに祈るまの光
をはるいを川流まを出りまを、吹く
列しくれをを知をを面をふるを安
りをを根たを海義門を年まを面

諭しをを百首ま温泉の和歌を言て
定義をして又をを人をを三ツ物をり

義門

いろを物をかをを見根を出る湯れ
和しを色を歌をを出をはれる
世を師毎汲人をを湯所も
を雲を見をを山の湯所

保孝

汲ありて諸人をあつむ此庄子の
ながれの泉にて薬湯ハ
山がた語し紅葉ばかりに染めて
ふもとより梢たかく見をしる

定義

いつくよりわき出て此すみて青根山
あかき年出湯の湯をかもし流
新湯いるばかりきこへつるあるは
この地し侍るは

紅葉ばの色の地し色よ秋の紅
あかぞ出湯もあさこそあるらむ

又津志くのすくきみよりて郡の長村の長
与ふ人をはらしくるしみ紅葉
されたる舟なに折よあしるはなさしりてなり
熊真あるく盟遊ハ日書刈田より山路
一里はかり狩てつまかに嶽坊とふ寺
あり不忘山の蔵王権現神の月照
らせるあしたに紅葉をさせぬむかしぬきはこて
ありしまつりて梅を七日ん日と飲み清地

けらしてきも出ぬ道のほとを何年ふるふ
とゝろよ高ぬかゝて御堂に詣て心う
祈きゝてゝ ゆゝ高ふ年て此ゆゝ事
ゝ所賜の御ふ中ゝ高ゝ村典領ゝ
祭ふ此ゝ所ふ出ゝ所ゝ此の山を称ふゝ
けきふゝゝ事ゝ高ゝ高ゝ高ゝ
うは夕ゝ稲ゝの存ゝ此ゝ志ゝ
かゝゝ花文ゝ式ゝ志ゝ信ゝ長ゝ道ゝ
かゝ山と云金山あゝ事ゝ此ゝ七代先ゝ
祖父ゝの此ゝふあゝ金の花きゝ

国の宝ゝ名ゝ花ゝ年経て咲き出ゝ
ゝ出ゝ事ゝ此ゝ所ゝ此ゝ富
からゝの乃ゝ人ゝ知ゝ
ふきゝ神ゝ事ゝ
さゝ事ゝ金の花も咲出
ゝ此ゝ徳ゝ
ゝふゝ
ゝ山ゝ
ゝ夕ゝ

[illegible]

未[illegible]今の花も咲ぬるなり

いたるまで細き[illegible]む山のあやしけ

かくて安倍の道[illegible]侍ふ人[illegible]おろし

紅の道の[illegible]草は花に名をよ

[illegible]のうちはぬるを見く

何を今見[illegible]百草を

[illegible]

[illegible]小萩

桔の[illegible]花よ[illegible]

つ[illegible]

[illegible]山[illegible]の

[illegible]

[illegible]

[illegible]人の嵐の[illegible]

[illegible]

今しう面目よりあるまつりを人こうち面白
くまつり者はしく踊りしめ振のうつり様の行れ
ぬ所をきこうしをかしかつの眞ハ上海
をたてくへきちあくしねを伺こしかくのあ
をたちうつ踊の屋の事をひまハ踊さ
しかをかつてハ一無ちうくの事ハ明まは
九日村典の領をる山の形場よりふるしを
組くいてこうれ山よりの村典正きあまさ
くくして山口より出くあまくこ彼の信霊を
このふ日暮てこの里まてあまくこ事に

東内して川口より入西ハ西野より加賀人
あまくこうせこ新ハ事ハ今新より
こうこの事こうちて面白ちあつて宝井
よりあの事ハ新こ孔こ切りこうこ事ハ
うつるる神とおりふ内ちあるあ赤ハを
川ちうこうこ事ハ事刈田の踊ちやに
入ちくくこうまあを方散ハ川の踊ちよ
面こ踊こうつくく人こうこハ事こ川つ事
あまくこくこうこうこ人ハ事こ川つ事
てこの孔宮り出行ちを山路の事こ

やあるんと高松の中あるあるを立ちてしるる面
雲を映して孤しを孤しを愛する
野の男のかをくるるに松入夫
こちらのこゝをもぬ市中の山城
十日鎌倉の温泉より行こうと松ひしら
山路遠しをを住をを伊へ行を
きれふの雨の野しに歩める人の笠の
はるをのうちのあるうち陸ひあれいあるぬ
此鎌倉といつるいに花よりをいく志ら
お彩陽をそ巷のうこと 祖父君も孤あい

孤つまいに何をあるにきよるるに月夫
をやをのこをそうち過るうれをこをみを
をのそ彩をんを鎌をそおをい雲ぬ彩を
まをいをを鎌をにをり如かくそ己の刻
はるをよるを日影をの見をれを人やをと
お角花をを見をるまを時をりかの
鎌倉より彩まをいくおをひり如に
行まるををみを出をを月をもあを孤を
かをへの人のを折つを彩をきをるり山路
きをやをい鎌をを彩をををををを

約束を書根のとをこを結ぶ形をと
おもはれ物つまの四すの山くをとこを結を
牡子美の兼山のふしきを一時人すれ
しをいひ山をかくやを物をいを屋
又家すむをこの山を明をに又越をは
南白人のいうをやを物のい記して
かはるを屋は月の半を編四子成
いうり為をして物のいやをを
十日明るハ時をを出を帰る為をを
を信憲の住を村田をいを所を結を

かは鏡を屋をを世を為を称ひ世を
うはう稚足のを原をに打捨を係を
おをしをを為を物ふをを何を屋を川
あををを車ふをを祭をを村典を家を
代をいををしあを新をを屋の屋を
んを里のををを屋をよの常をを家を
今をすをおをを入ををのを屋を
かを家ふのををを又むやをを学ををハ
村典を下屋をを家をを男をを家を
あ川をを力角をを人作をを屋をを

しき葉かなりやかくて見ぬ例の人々
伴ひて極楽より入西聖人を始めて
数の家のいめをもまた作まうに為なれば
こゝろおぼえ侍

又そむむ道をいとなむ者今
ちまもこゝろよ山のうゝ水
折しも雨ふりもきたる

保孝

立帰る天の川なれば織ふむ
ちをさしかるよ山のたゝそ

明れば十二日相模守殿極楽より清水
参のよ所なりしかば猫殿光乃御堂
湯殿の赤山のもとまで花ちる年よ
ゝ京の中を抜て出ることなく称ふ
ちをあ移花を過ぬるを出ぬる
墨を時を市ちとめ物もむ財の
いゝ山道をたゝるわれの上の湯坂
萱作ゝるのほ見ぬ四方を
山ゝ岩をゝ高ゝ中ふ限ゝ続ぬ
萱原の東山ゝ所所を矢庫し

又草刈をのせたる馬子に出会て
問の人に問へば是は刈田あるよしを聞て
刈あるをそこへ行く山路なれば
半町許のかくれなき芦原
誰かにきてつかはしたる里とおぼ
しきもとかくもとも山のうるかなる
形にて田の畦なる山より山の上に
軒をならべたる家ハ立ちよりすべからず
きゝあり

時雨降て雲たゝに陰の見へて
ゆふ日の光の山にうつる軒かなたに
きこえしの一里ばかりを見れば書振れる山のうち
絵にて不見ぬもの見ぬ
酒屋数名酒をあれもいとゝ牡
丹もさきの山おのゝ作り
かゝて絵にて遠刈田の路よりれハ道の中に
温泉あるゝ笛の滝の書きたるゆ
ひときたの名ぬを活用あるよ又
湯屋出湯の滝乃ものよに

是よりも永野といふ里までの道をゆくもた
山なる人面を黒部て雲は馬路にかかり
なかばより雨ふり出て雲の隙もなく
見わたす様を取集の一首にはなれてすく
道すがら蕨など埋れ水ぞ見えわかれて
枝折おしと見ちも今は霧深く
　蕨をふみて越る山の通路
又や時雨んと思ひし雲の晴ますすみたり
松の葉川の流れと打流るるは凄しくも
まれ物さびしう見ゆかくて永野に今の是成

屋敷あまた見えて人ありせ程なく立出ぬるに
雨いとふ降まさりに多季
　降しきる雨にぬれつつ道芝の
　露もまさりし袖のあはれさ
道の辺の茂みの中に枝ちる小草花
見よまたれつつ名もなきと見えたり
　種まいて折かしや今は枝ゆく
　なとそれならふに深き下草
見にしるそのかへり初秋過ぬ村田の境に
信濃出むかひぬ堺かたり川成の割過

[illegible]の鎌より[illegible]く信憲[illegible]
語りぬ[illegible]大樹の[illegible]日[illegible]
[illegible]
いと[illegible]寒ぬ十二日[illegible]
[illegible]信憲[illegible]
山に入ぬ[illegible]
[illegible]の人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]里の猟人[illegible]
[illegible]山を囲[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]
[illegible]十[illegible]
[illegible]村田の鎌[illegible]信憲[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

湖はさゝ松原なくゆあしまき箱根に沿し
うらも日毎にかの温泉に二日ゐたりは入し
うは今年まさしくて塔場のわたりなくて
人ゝまゝれに箱根の草木をいはゝと笠
十四日今日は塔まことに那美なし人ゝさ
暁し宿は見れおくひく志ゆく名にし
村田新出ぬ新宮乃里わたし寺ゟ
をも枯野の草も二日とはひ花信ふしあかね
笑も我もむらむる栗草蘇のあれる名
いとゝ袖をむみちる子

むかひ見ゆ外山の雲総ゟも
清まさまそさむき袖乃露し毎
山路たとる里村清く家の下道
行ほも紅葉のいまむを村里多禮を
湯山路行見しふ暮ふ紅葉を
たまき濡の色みち色を染して
枝よ秋風に紅葉のちらせるをみて
此ある乃あかにかつらは袖のよしみふ
このちをちらは松ちる色　詠
健かの鶯と起すを山田里よめかきの栗

[illegible]
かくて櫛木とりふ驛おりて伊武隈の
川を[illegible]道をあるくに日ともまる程
多くは水をも白河の関に流出る
いさゝ小川の水流くゞ掛けて行るを
彼国をもてまたに流て海と落るを
きに城江の中あるかゝ[illegible]と知るい
しまの間を渡る小舟の行ふ面もい
まん岸のあるる松の木立るをく
泳あるまるを彼の森のあるを

朱の鳥羽[illegible]に仏事の[illegible]
まるを[illegible]かけ[illegible]
陸奥の国[illegible]明神を[illegible]
[illegible]年月六日頃の夜[illegible]
かしあまるを[illegible]
[illegible]を例しかゝ[illegible]
岩沼の[illegible]入ぬ[illegible]
くしたゝぬ物を出るを[illegible]
[illegible]の風をして柴のかゝ屋の住居
あるは[illegible]

塩手帰るを礼を義門保茂等多くいて
ともに久しきを以て年の劫るほどを経
出ぬ行くを見れを雪をいとを山を遠
代の雪を根のくを雪れをよりぬ
うくて名古屋川をいくを
名古屋川花よりは埋木を
いかを水のをくをみふしを
洲川の橋をかるを見るに梁断を今日
をを水のをくをいれるを断くのをくを
ををを水をを見をを人埋木いかをあを

富士見をををを

保茂

水流をを川をををを埋木の
なををの川を礼をかれを
水ををををは近をを
埋木の名所ををいかを
うを流の水乃流ををを
月を夕雪の塔をにををの八幡をも
京いををにを里の道を駒を
移をを芳野をを塩手帰を

昭和九の

神無月

重村

天保十二年八月廿七日ノ出来事ニ候

一 吉根日記ノ写ニ

水戸藩内ニ異変

沙汰ニ

[illegible]

[illegible]

[illegible]